詩人としてのワイルド

伊　藤　　勲
（東京成徳短期大学助教授）

十九世紀はヨーロッパ文明が世界に広汎にゆきわたつてゆくとともに，ヨーロッパ的なものもヨーロッパ的でなくなつた膨張の時代であると見られてゐる。ヨーロッパ人の普遍主義とその文明の膨張は，個性の喪失や自己の姿を見失ふことと背中合はせにあつた。この傾向を倍加したのが，自らの価値基準をもたない没個性的な中産階級の擡頭である。十九世紀はまた，科学の長足の進歩を見た時代で，科学は知識の獲得を急務とし，細分化された直線的な発展に特徴がある。個々人の内面生活においても相互の断絶を招来した。ヨーロッパにおけるこのやうな文明の膨張や普遍主義と自己喪失，中産階級と偽善，事実重視と想像力の欠如，直線的進歩と断絶的細分化などにあらがひ，ペイターの藝術思想とギリシア思想を土台にして，個人主義の実現による失はれた魂の恢復を図らんとし，中産階級の価値観の欠如と卑俗に潜む偽善を当意即妙の逆説によつて鋭く衝くワイルドを，藝術そのもののあり方が問ひ直されてゐた世紀末に，藝術の本質としてのポエジーを探求した人として捉へていいのではなからうか。

細分化された閉塞的な時代状況を克服すべく，綜合的な藝術への欲求が高まり，相互浸透的な藝術形態が生み出されるやうになつたのが，所謂「世紀末」であり，ペイターはその特筆すべき魁であつた。ペイターの創作はジャンルの境界を越え，クリティカル・エセーの延長線上にあったし，また散文を詩的散文の域にまで高めた。散文を批評的な詩にしたのがペイターであるとすれば，ペイターを継承するワイルドは一体何であつたか。先づはワイルドの本領はペイターと同じく，批評的エセーにあつたと言つてよいのではないか。

事実の本質を巧みに衝くワイルドの逆説に満ちた対話的エセーは，丸彫りをする彫刻家のやうに全方位から見る彫刻的な自由な角度に恵まれてゐる。この彫刻的角度がワイルドの思考に自由を与へるとともに，ワイルドたらしめてゐる詩的角度といふものである。

ワイルドの藝術は，会話的な滑らかな流れの中で対象を様々な観点から眺めうる余地を残し，視点を固定しないことによつて自己を解放し，対象を見ることを通して自己を観察しやうとするものである。ワイルドは自由で多角的な内面的対話であるエセーの意義をペイターから学んだものと思はれる。対象を見る位置を様々に変化しうる自由な思考は，機知の働きを得ながら，詩的角度といふものを生み出した。

詩的角度，それは関係性の認識にある。ペイターの言ふ相対主義的精神の継承がそこにはある。普遍主義は他者の否定であり，自己の客観的観察を離れて自己の喪失を招き易い。この普遍主義を否定して，世界や自己を相対的見地から眺めたのがワイルドである。ヨーロッパも世界の中のひとつの地方と見る関係性の認識がワイルドにはあつた。他者の理解が自己の理解となり，自己を相対的に眺めることによつて自己たりえた。この他者と自己とに対する相対的な認識は，ワイルドの個人主義の一部をなすものである。

藝術のための藝術といふのは，自己を取り戻して自分自身になることを追求した魂恢復の運動である。ワイルドがこの運動において美の理想としては自然を拒否したのは，藝術における形式といふのは自然の純化と精神化であり，自然は単なる素材に過ぎないからである。理想美は単なる自然美ではなく，素材としての自然の美しい表象でなければならない。藝術美はその自律性を根拠とするものであるが，自然の事物は自然法則による支配を受けてゐる他律性に特徴がある。ワイルドが拒んだのは，偶然的なものとして観察される，単なる素材としての自然である。ワイルドにとつて自然が生きてくるのは，自己との関はりを得てそれが自律性を獲得したときである。

美は自然の精神化といふ自己と自然との関はりを測り，それを洗練したところに生まれる自己同一性に支へられた形式にある。まさに美は関係性にある。対象と自己との関係の中から生まれ，またそれを表してゐる形態が藝術においてすべてであるのは，その意味からすれば当然である。文体或いは形態は個人そのもののシムボルであると同時に，他者との間に結ばれた関係の具体的な顕れであれば，それは個でありながら個を超越してゐる。そして関係それ自体は無であるが故に，虚偽や偽善からは常に自由でゐられる。

対象をあるがままに受け容れるといふことは，己に囚はれず自己や対象を相対的に認識するための第一段階である。ワイルドにとつて受け容れたものを観照することは，我欲を排した自己を通して人間の本質を見つめることであつた。しかもワイルドは逆説的に世の中を見やうとする関係から，絶えず自己をその逆説で追ひ詰めることになり，自意識を深め，対象を鏡にしていつもそこに自己を写して見てゐなければならなかつた。自己を対象として観察し認識することになる。ワイルドは受容的気質と観照の中で，社会も自己も相対的な関係の中で捉へ，対象を却つて自分を写す鏡にしたのである。このやうな形で自己を顧みることがワイルドにとつての批評であり，批評に最も適した形態が内面的対話としてのエセーであり，批評がまた同時に機知の働きを得てポエジーとなつた。加ふるに，彼は受容性と批評精神によつて言葉を恢復した。言葉が明瞭にものそのものを指示しえず，事物をただぼんやりとした観念としてしか喚起しえなかつた時代に，ワイルドの言葉は簡潔にものそのものを喚起する力を持つてゐた。このことだけでもワイルドは詩人の名に値する。

言葉の恢復と逆説的な批評精神にワイルドの詩人としての魂があり，それは彼の詩作品そのものよりも，クリティカル・エセーにその本領が見出せる。ワイルドの優れた戯曲も，その精神はクリティカル・エセーの延長線上にあるのである。